

ミューズ教育思想における〈余暇と労働〉の問題

The Problem of Relationship between Leisure and Labor in the Thought of 'Mysische Erziehung (Education in Things Musical)'

長谷川 哲 哉

Tetsuya Hasegawa

2005年10月7日受理

I. はじめに

ドイツ近代のミューズ教育思想の歴史とその核心について筆者はすでに長年研究し、その成果を諸処において順次発表してきたし、またそれらを体系的に纏めた学位論文が年末には公刊される予定である²。よって筆者によるミューズ教育思想の研究は一段落つくことになる。しかしながら、この間筆者は、上記学位論文において十分には考察しきれなかった問題が幾つかあることを自覚し、それらについての論考を図ってきた。当拙論は今後も引き続きなされるべきこの一連の企ての一部をなすものである³。

第二次大戦後のドイツにおけるミューズ教育思想の代表者はオットー・ハーゼ (1893~1961) であるが、彼はその論文「ミューズの生と芸術教育」(1960) において、ミューズの的なものの本質規定に関わって以下のように述べている。「ミューズと余暇は音響的関連のみならず本質的関連のなかにもある。」ここでの「音響的関連」とは、ミューズ (古代ギリシアで諸芸術を司った女神の名称) はドイツ語で Muse と綴り、その発音は「ムーゼ」であり、他方余暇を意味するドイツ語 Muße は「ムーセ」と発音するので、それらの語の「音響」すなわち発音が似ている、という事態を意味する。そしてハーゼは以下のようにも述べる。「ミューズのなもの (das Mysische) の生活空間は、落ち着きの無さと慌しさが支配するところではなく、充足せる余暇 (ムーセ) 的時間 (Musestunden) の朗らかな平静が支配するところにある。」⁴ この「ミューズのなもの」の育成がミューズ教育の中心的目標なのであるが、「ミューズのなもの」は余暇の時間、すなわち強制や拘束なき自由な時間においてこそ、その生命をまっとうするのである。

ここでの「余暇」とは後述するように、結局は労働に資するような意味での休暇とか、日本語のいわゆる「レジャー」とかではなく、思想的に裏付けられた積極的価値あるものとしての余暇を意味している。すなわち、近代における産業主義や生産至上主義を基盤とした労働観、労働の本質は人間の本質であるが故にそ

れを美德ある行為とみなす労働観を否定する立場を含意している。ミューズ教育思想は近代批判を基調とするが、このように、近代的概念としての労働をも鋭く批判する。それは労働を狂気、迷信とみなすのである。多忙と勤勉を否定し、その反対に無為と怠惰を称揚するのである。(もっともこれらは文字通りの無為と怠惰を意味するのではない。) これは、美德行為としての労働という観念がおよそ骨の髄までしみ込んでいる我々一般人にとっては、まことに奇異な異端的な立場であり、正直な反応としてはこれに対し怒りを覚えるほどであろう。しかし、労働に対するこの批判的立場には、それ相応の確かな、一考に価する思想的根拠がある。よって当拙論の第一段階は、ミューズ教育思想における労働観と、これと不可分な関係にある余暇観とをあらためて確認する仕事にある。

ところで、ミューズ教育思想が今日なお検討されるに値する根拠のひとつは、すでにハーゼの言説から明らかのように、ミューズ教育思想が、労働ではなく余暇が支配する生活の実現を主張するという一種の文明改革論でもあるからである。(その意味で、ミューズ教育とは方法ではなく、原理である。) しかし、そのような生活の実現は可能なのであろうか。すでに発表した拙論において明らかにしたように理論的には、その原理的可能性は確かに認められる⁵。しかし理論的地平ではなく、実践的地平においても、そのような可能性は見出されるのであろうか。すなわち、余暇が支配するような生活の実際のモデルは、たとえ小規模であれ、現にこの世界に在るのであろうか。このモデルがあれば、そのような生活の実践的方法のヒントが得られるはずである。そしてそれが得られれば、ミューズ教育思想が夢想的なものではなく、現実性を孕んだものであることが認識されるであろう。

その生活モデルとは、後の章で詳しく述べられるマエンゲ・モデルである。マエンゲとは、南西太平洋上のニューギニア島の東部に位置するニューブリテン島に今も原住している一種族の名称である。このマエンゲ族にはおよそ労働概念は認められず、彼らの生産活

動において最も重視されるのが美的価値——あえて換言すれば感性的快の価値——であり、これに伴う倫理的価値なのである。そこには美的なものを媒介とした共同社会の形成と維持がある。だから、彼らの生産活動には、近代的労働に固有な苦痛、労苦はなく、自己実現としての楽しくも張りのある生産活動のみが営まれる。すでに発表した拙論において明らかにしたように、ミューズの的なものとは美的—倫理的価値概念であるが、この美的—倫理的価値（換言すれば「感性的なものにおける道徳的なもの」⁶⁾）が図らずもマエンゲ族の生活原理となっているのである。この事態を本拙論は、人類学による成果を参照しながら、正しく把握しようと企てる。

かくして当拙論は、まずミューズ教育思想における労働観と余暇観とをあらためて確認し、次いで、「ミューズの的なもの生活空間」である余暇が支配する生活を実現するための方法上のヒントとなる生活モデルを、マエンゲ族の生活に求める。すなわち、マエンゲ族の生活をミューズ教育思想の視点から検討することを企てる。その成果はミューズ教育思想の現実性を認識する端緒となるであろう。

II. ミューズ教育思想における労働観と余暇観

II-1. O・ハーゼの「余暇」/「ミューズの生」

まずはハーゼの言説を先に引用された以上に尋ねてみよう。「ミューズの的なものが繁茂する生活空間を見出し限定するためには、ミューズ(Muse)と余暇(Muße)という言葉の意味関連が明るみに出されるべきである。周知のごとく、生活にたいする西欧人の関係は、生活は労働によってのみ克服されるべきだという実りなき迷信によって妨害されている。これ以上に、余暇は生業と並んでまったく同等の地位にあるということが忘れられてしまった。この事態をもっとも鋭く見据えたのはオルテガ・イ・ガセット(1883~1955、文化哲学者：長谷川注)である。『古代ギリシャ・ローマ人は生活を二つの区域に分けた。一つは、彼らが休息(otium)と名付けたもの、余暇であり、これは活動の否定なのではなく、人間における人間的なもののかかわり合いなのである。—他の一つは、努力によって満たされ、その結果、基本的欲求すなわちあの休息を可能にするものすべてを満足させる区域であるが、これを古代ギリシャ・ローマ人は労苦(negotium)と名付けた。彼らはこの言葉によって、この区域が人間に対して有する否定的性格を適切に特徴づけたのである。』⁷⁾

ここでの休息(otium)は余暇を意味するから、またハーゼの論旨からして、その反対語としての労苦(negotium)は労働を意味する。そして、労働が「人間に対して有する否定的性格」を有するという考えは、我々近代人には馴染みのない、偏見とも受け取れる価値

観であるし、またそれは古代に特殊な、普遍的には妥当しないものであるとみなされるであろう。それが特殊とみなされる根拠は、周知のごとく古代社会では奴隷制がしかれていたからである。奴隷が労働を一手に引き受けていたのである。そうならば、平等を最高理念の一つとする近代社会では、全ての人が等しく労苦／労働を引き受けるべきであるからして、すなわち近代にあまねく流布した労働倫理の標語：「働かざる者は食うべからず」からして、労働が「人間に対して有する否定的性格」を有するという考えこそ否定されることになる。

しかし、これへの反論のひとつとして（もうひとつの反論は直ぐ後にあつかう）、近代では人は働きすぎ、必要以上に生産しており、そのため人は余暇を、すなわち「人間的なもののかかわり合い」を喪失しているという考えも成り立つであろう。それを果敢にも表明したのが、フランスの社会主義者でマルクスの娘婿でもあったポール・ラファルグ(1842~1911)である。

II-2. P・ラファルグの「怠ける権利」

彼はその著『怠ける権利』(1880)において、近代の労働者の奴隷的状态を嘆き批判して以下のように述べている。「資本主義文明が支配する国々の労働者階級はいまや一種奇妙な狂気にとりつかれている。その狂気のもたらす個人的、社会的悲惨が、ここ二世紀来、あわれな人類を苦しめつづけてきた。その狂気とは、労働への愛情、すなわち各人およびその子孫の活力を枯渇に追いこむ労働にたいする命からがらの情熱である。」(以上冒頭の一節。)この悲惨を克服するために労働者階級は「自然の本能に復し、ブルジョワ革命の屁理屈屋が捏ねあげた、肺病やみの人間の権利(「労働の権利」のこと；長谷川注)などよりも何千倍も高貴で神聖な、怠ける権利を宣言しなければならぬ。一日三時間しか働かず、残りの昼夜は旨いものを食べ、怠けて暮らすように努めねばならない。」実際のところ「昔の連中は、この世の喜びを味わい、恋をし、浮かれ騒ぐための余暇をもっていた。」それなのに「人類を奴隷的労働から解放し、人間動物を自由人に高めるべき階級、プロレタリアートは、自己の本能を偽り、自己の歴史的使命を顧みず、労働の教義で墮落させられるがままになっている。」以下本文末尾の文：「おお、怠惰よ、われらの長き悲惨をあわれみたまえ！おお、《怠惰》よ、芸術と高貴な美徳の母、《怠惰》よ、人間の苦悩を癒したまえ！」⁸⁾

これらを読むとき我々は、「人類を奴隷的労働から解放し、人間動物を自由人に高めるべき」という考えにたいしては直ちに肯定するが、「一日三時間しか働かず、残りの昼夜は旨いものを食べ」云々などという考えにたいしては、現実原則を理由にして深い疑念をいだくであろう。ラファルグはこれについて彼なりの計

算と仮定的考察をしているのだが、今ひとつ説得力に欠ける。しかし、今日ではマーシャル・D・サーリンズ（1930～）がその著『石器時代の経済学』（1972）において教えてくれるように、古代（旧石器時代）や未開の社会では事実として、一日三時間ほどの労働で十分に豊かな（「資源あふれる豊かさ」の）生活が可能なのである。サーリンズがその豊富な実証データに基づいて言うには、「（一人当たりの）労働量は、文化の進歩につれて増大し、余暇量は減少したのである」⁹し、「文化の進歩につれて、飢えの量は、相対的にも絶対的にも増大してきた」¹⁰のである。

そして重要なことに、例えば著名な、後の章で扱われる人類学者B・マリノフスキーが教えてくれるように、この社会の人々はその労苦なき自由な時間、余暇を自己と共同体のために費やすのである。これはマエング族にもあてはまる事態であるだろう。後の章で扱われる、マエング族を研究したM・パノフの研究成果が示すように、彼らは作物菜園を「芸術作品」のごとくに仕上げ相互の鑑賞や批評を行なうのである。飛躍を恐れず言えば、ここにはラファルグの言う「芸術と高貴な美德の母、《怠惰》」が現実のものとなっている。

ラファルグは『怠ける権利』の「付録」において、自身の説の根拠として西欧古代の労働／余暇観に言及している。彼はまず、著作の現存するギリシア最古の歴史家であり「歴史の父」と呼ばれるヘロドトスから次の一節を引用している。「『ギリシア人が労働にたいしてもった軽蔑は、エジプト人から受けたものだとは言いきれない。なぜなら、トラキア人、スキチア人、ペルシャ人、リディア人の間にもおなじ軽蔑があるのをわたしは知っているから。一言でいえば、大部分の未開族では、工芸技術を身につける者は、その子供らさえ、最下級の市民と目されているのだから……。全ギリシア人、ことにスパルタ人は、こうした方針のもとで育てられた。』（『ヘロドトス』第二巻、ラルシュ訳、1876年。）」次いでラファルグは同様の価値観がプラトンの『国家』第五巻、クセノフォンの『家政学』、アリストテレスの『政治論』第三・四巻にも認められることを指摘する。かくしてラファルグはこう述べる。「これら古代《共和国》の哲人たち〔……〕プラトンやアリストテレスは、『理想共和国』市民が最大の余暇のある暮らしをするよう希った。けだしクセノフォンは言いそえている。『労働はいっさいの時間を持ち去り、《共和国》や友人のためにあてる暇がなくなる』と。」¹¹

しかし、こうした古代哲学者たちの価値観には労働にたいする偏見が含まれている、とわれわれ近代人の誰もが非難するであろう。この問題については、ラファルグが、古代哲学者たちが奴隷制度を認め共和国の前提とした事実をもって彼の主張に反論することに対し次のように反駁（これが先に予告した「もう一つの反論」である）するくだりが、適切な解決の方途となる。

「しかし、その時代の政治および経済を考えると、事情がかわってはこないだろうか。戦争は古代社会では普通の状態であった。自由人は《国家》の問題を検討し、防衛を考えるために時間を当てねばならなかった。当時、手先を用いる職業はあまりにも原始的で粗野なものであったから、これをやりながら兵士と公民の務めを果たすことは無理だった。戦士と公民を獲得しておくために、『英雄共和国』では奴隷を哲人らは黙許しなかったのだ。——ところで資本主義のモラリスト、経済学者も、現代の奴隷、給料生活者を推奨しているではないか。」¹²

こうして我々は、ラファルグが古代の特殊条件を差し引いて行なった考察の結果から、古代哲学者たちの価値観のなかに普遍的に妥当する思想的遺産を見出すことができる。「自由人は《国家》の問題を検討し、防衛を考えるために時間を当てねばならなかった」、すなわち余暇をもたねばならなかったが、しかるに労苦である「労働はいっさいの時間を持ち去り、『共和国』や友人のためにあてる暇がなくなる」がゆえに、労働は否定され余暇が肯定されたのであり、この立場は、本来的に自由人であるべき我々にも妥当するのである。個々人の人生問題のみならず、公共の問題、公共の事柄についてじっくりと考えるには、多忙と勤勉の支配する労働世界から解放され、自律的に考えることのできる自由な時間、すなわち余暇を我々はもたなくてはならないのである。近代社会の最高理念である〈自由と平等〉も余暇の確保のうえに築かれるであろう。

こうして、ミューズ教育思想の代表者ハーゼがその主張の証左とした、オルテガからの一節の内容には、高い程度の根拠性があるとみなされるであろう。ということは、ミューズ教育思想における労働／余暇観は、我々がよくよく傾聴すべきものである、と言えるのである。

II-3. F・ヴェルフェルの「暇」/「ミューズの領域」

ところで、ハーゼがその先駆者とみなしたのは表現主義の文芸作家フランツ・ヴェルフェル（1890～1945）であるが、彼についてミューズ教育の研究者フリッツ・ザイデンファーデン（1929～）は、「ヴェルフェルはミューズ的なものを弁護する一形式を創り出し、正しくそれは大抵の論拠付けの模範になった」¹³と述べている。ヴェルフェルのミューズ教育論の代表作は『現実主義と内面性』（1932、これは講演原稿）である。彼によれば「現実主義」こそ、あの労働倫理の源泉なのである。そこで、ミューズ教育思想をよりよく理解しておくために、彼の言うところを以下に聞いてみよう。

アメリカもロシアも、資本主義も共産主義も、「急進的現実主義」あるいは「即物信仰」において一致している。本来の文化的意味での現実主義とは異なっており、またフランス革命以来成長してきた急進的現実主

義は、歴史的唯物論・実用主義・経済優先主義・行動主義など幾多の下部領域をもって世界を理論的に征服している。しかし問題になるのは単なる理論ではなく、信念・態度である。この現実的態度は「人間の内面性、魂、創造的精神」を憎しみの対象にするからである。それには二種の原因、神に反抗し自律を求める形而上的原因と、文化無き新興ブルジョア階級の劣等感から生ずる時代的原因とがある。「暇に耐えるには、内面性の資本家でなければならない」のに、彼らは「労働の理想」、「業績・能率の道徳」をつくったのである。「ブルジョワがけっして知ることもし、理解することもできなかったこと、それは、精神すべての始まりは暇である、ということである。」(以上の傍点：長谷川。なおここでの「暇」の原語は'Müßigang'であるから、「余暇」の他に「無為、怠惰」とも訳せる。)'労働という言葉が意味するものは経済的活動以外のなにものでもない。すなわち財貨生産とその消費への熱狂的な取り組みである。」¹⁴。

ヴェルフェルは続ける。「論を進める前に私は一つの公理を立てたく思います。すなわち、内面性がなければ外的現実がなく、想像力がなければ現実がありません。」これは古くからの単純な真理であり、人間が味覚を無限に洗練・選択すること、すなわち内面性により食事の際に幾百もの現実を体験しえることで証明できる。物が人間の尺度なのではなく、人間があらゆる物の尺度なのである。「幸福とは、内面性のために矯正された現実の豊かさなのです。」¹⁵誤った理想である現実的態度すなわち「即物信仰」に対して戦いを挑むかどうかは、我々の文化の運命問題である。しかし、「創造的内面性」が打ち明けられる三つの領域のうち、宗教と倫理は無神論によって抑圧されており、科学と思索は「知性の神格化」によって不完全——例外はアインシュタインぐらいである——になっている。人間精神の知的規定の不可能性についての彼の言説を敷衍すれば、「人間の根本的立場は合理的にではなく、美的に条件付けられています。」かくして希望の残るは「芸術と想像力(Phantasie)、すなわち「第三の領域、ミューズの領域！」である¹⁶。「即物信仰」に基づきただ働くだけの「事実の人間、行為の人間」とは対極にある「ミューズの人間は充足せる人間、我々の中にいるあの天国の鍵の守護者なのです。」¹⁷

以上の言説には歴史認識の点で不十分な点があるかもしれない。しかしそれをここでは問題にしなくともよいであろう。それよりも、「精神すべての始まりは暇である」から、「労働の理想」と「業績・能率の道徳」は誤りであるというヴェルフェルの主張が、ミューズ教育思想の核心を言い表していることに注目したい。「暇(無為、怠惰)」こそが文化の、それも根本的なものとしての美的文化の始まりであるとする見解は、人間学的真理をついている。「暇」においてこそ「創造的

内面性」が打ち明けられるが、それは先のオルテガの言葉を使って言えば、「人間における人間的なもののかかわり合い」が生起するのは「暇」においてである、ということである。

一般的に言えば、ヴェルフェルは人間生活における美的なものの根本的作用を「ミューズの」概念によって適切に表現したのであった。だから、マエンゲ族の生活が人間的であると判断できるならば、それは、彼らがその生活においてこの「美的なものの根本的作用」を日々生かしめているからである。後に明らかになるように、事実マエンゲ族は、その主食が生産される作物菜園を「芸術作品」のごときものに仕上げている。そして言うまでもなく、芸術的表現は他者への呼びかけ、対話への誘いであり、芸術には本来的に共同体形成の機能がある¹⁸。だからマエンゲの人々は、各自の作物菜園を相互に鑑賞するだけでなく、その美的評価をめぐって共同の討議を行なうのである。

Ⅲ. 美的人間——人類学の知見から

Ⅲ-1. B・マリノフスキーの知見

イギリスの人類学者プロニスラフ・マリノフスキー(1884~1942)は、ニューギニア群島(特にトロブリアンド諸島)の未開の原住民を対象にしたその研究書『西太平洋の遠洋航海者』(1922)において、「民族誌学者」の「最後の目標」およびその効用を以下のように規定している。それは「原住民のものの考え方、および彼と生活との関係を把握し、彼の世界についての彼の見方を理解することである。われわれは人間を研究しなければならない。人間の最も本質的な関心、いかに言えば、人間をつかんでいるものを研究しなければならない。」これによって「人間の心が明らかになり、近づいてくるだろう。われわれとは遠く離れ、不思議な姿をとって現われた人間性を理解することによって、おそらく、われわれ自身のうえに若干の証明が与えられるであろう。」¹⁹この言説は、人類学が本来、人間の本質を研究する人間学であることを再認識させている。だから我々は、マリノフスキーの研究結果から、人間生活の最も基本的な、変わることもない本来的な必要が何であるかを知ることができる。彼の研究はいわば、近代西欧的なものの見方・考え方(当拙論の問題範囲に限定すれば近代「労働」概念)への挑戦でもある。

マリノフスキーによれば、「原住民の働く生活のなかばは、この畑で過ごされ、おそらく彼らの興味、野心のなかば以上がこれにつきこまれる。」だから彼はこの農耕生活をその民族誌学的方法で詳細に調査し報告しているが、そこには、我々にとって看過できない重要な一節がある。「あらゆる小石を取りさって、きれいなござっぱりした畑を作り、みごとでがんじょうな垣根を結び、ヤム芋用の強く大きな柱を立てるなど、審

美的な目的に、たくさんの時間と労働を捧げる。これらの仕事は、あるていど植物の成長のために必要であるが、原住民が純粋な必要性の限度以上に、良心的にやることは疑いない。野良仕事においては、非実用的な要素がみられるが、呪術的儀礼のため、または村の習慣にしたがって、まったくの装飾のために行なういろいろな仕事に、いっそうはっきりとそれが現われている。たとえば、土地が慎重に開墾され、植えつけの準備ができると、原住民はそれぞれの畑を、一辺数メートルずつの小正方形に区切るのだが、これは、畑を小ぎれいに見せるための習慣を守ってそうするにすぎない。自尊心のある人間が、それをしわすれるようなことは、とても考えられない。」²⁰「トロブリアンド島人は、多分に仕事自体のために働き、畑の外観や体裁が美的にみえるようにとずいぶんくふうする。」²¹

このように未開の原住民が「審美的な目的に、たくさんの時間と労働を捧げる」のは何故であろうか。それは、飛躍をおそれず推論すれば、美的価値を実現する仕事（端的に美的表現活動）はその当事者にとって楽しく快いからであるし、また、その成果を観察する非当事者にとっても楽しく快いからである。美しいものをつくりたいという要求は、人間の本質にかなっている。（このような性質の仕事はもはや、労苦と同義であるあの近代的「労働」概念とは無縁であることに注意しておきたい。）しかもそれに成功すれば、他者の賞賛や承認を得るが、それはその美的価値に共感し共鳴しているが故であるから、美的価値を実現する仕事は、必然的に社会的意味を帯びる。すなわちそれは、人と人との連帯性、同胞性を生み出したり確かめたりするのである。もしトロブリアンド島人の畑を一種の芸術作品とみなすならば、ここでは芸術の公共的性格が如実に現われていることになる。

ところでマリノフスキーによれば、トロブリアンド島人の労働作業の形式には「組織的労働」と「共同労働」との二種類があり、後者はさらに五種類に分かれるが、この「共同労働の演ずるとびぬけて重要な役割は、畑仕事」、とりわけ開墾作業にみられるのである。そして「この形式の作業には、大きな心理的利点がある。このほうがずっと刺激的でおもしろく、競争心を起こさせ、その結果、仕事の質もよくなる。〔……〕これは社会学的に重要である。なんとなれば、共同労働は、広い範囲にわたっての相互扶助、奉仕の交換、仕事における連帯性を意味するからである。」²²かくしてトロブリアンドの共同社会においては、各個人はその分与された「畑の外観や体裁が美的にみえるようにと」創意工夫することによって連帯性を生み出すと同時に、「共同労働」による畑作業においても「相互扶助」や「連帯性」を強めているのである。ここで憶測しておきたい点は、この共同の畑作業においても、「審美的な目的に、たくさんの時間と労働を捧げる」という傾

向が見出されるであろう、ということである。これは、マリノフスキーの報告文の端々からして、とくにカヌーや倉庫のような、「組織的労働」や「共同労働」の方式でつくられる建造物に美しい装飾がほどこされる一般の傾向を彼が述べていることからして、おそらく間違いない傾向である。となれば、トロブリアンドの共同社会においては、美的価値の追求はその生活を支配する一法則でもあると言っても過言ではないであろう。

もっとも、マリノフスキーによれば、トロブリアンド島人が働くのは「伝統の力、義務、呪術的信仰、社会的野望、虚栄などの複雑な要因の組合せに導かれて」のことなのであるから、美的価値の追求がその最大の要因というわけではない。しかしながら以下のように考えることができる。ここでの「社会的野望、虚栄」とかは、近代社会における〈競争と選別の原理〉あるいは〈利己主義とその効率の思考〉によるのではない。（「野望」とか「虚栄」の語は誤解を生みやすい。）彼ら未開の原住民はマリノフスキーによれば、「私利私欲を求める合理的な考えにうながされて〔……〕目前の欲求の満足を志向し、功利的目的を直接に達成するのではないのである。〔……〕多くの時間とエネルギーが、功利主義的見地からすれば、まったく不必要な努力に費やされるのである。さらにまた、仕事と努力とは、単なる（功利的・経済的な：長谷川注）目的のための手段ではなくて、ある意味でそれ自体を目的としている。」²³しかし、それは何故であろうか。それを極めて平明に表現すれば、〈人間としての生を楽しむ共々に享受する〉ために仕事をするからなのである。だから、そのような心的態度に、あらゆる場面において美的価値を実現しようとする基本的志向が生きて作用する余地がある。それだから、「社会的野望、虚栄」は、美的価値の追求によって〈生を楽しむ共々に享受する〉際の、その共同性意識から生まれる承認欲求である、すなわち共同社会の一員として他の成員からその役割や位置を十分に認められたいという社会心理的な欲求である、と考えることができる。

「それ自体を目的としている」ごとき仕事は、もはや近代的な意味での労働ではなく、一種の遊戯である。遊戯だからこそ、労苦をとまわず、そこでは美的価値が無限に異なった形象をもって生み出されるのである。この事態に関連することをハーゼはこう述べていた。「ミューズ的なものの生活空間は遊戯である。遊戯の喜びには一つの生命力が含まれており、これは汲み尽くされえず破壊されえないことが今までにわかっている。」²⁴そして先述したごとく、同じハーゼによれば、「ミューズ的なものの生活空間」は「余暇的時間」にあった。「遊戯」は「余暇的時間」において営まれる。かくして論理上、トロブリアンド島人の仕事の方式のなかに、「ミューズ的生」（ハーゼ）を実現するための

方法上のヒントとなるモデルがある。このように見られた彼ら未開の原住民の仕事は、もはや労働ではなく、余暇の一遊戯的な仕事、すなわち「ミューズの」仕事と呼べるであろう²⁵。

III-2. F・パノフの知見

マリノフスキーがトロブリアン島の原住民を調査してから半世紀後に、そこから北に約250キロ離れたニューブリテン島²⁶の原住民を調査したのが、フランスの人類学者ミシェル・パノフ (1931～) である。彼はあの高名な人類学者レヴィ=ストロースの弟子である。このM・パノフはその論文「エネルギーと力：ニューブリテン島における労働とその表象」(1977)において以下のように述べているが、その要点は、上に検討されたマリノフスキーの知見と基本的に一致している。「少しでも注意深く、予見を排して見れば、西洋人の観察者はこのマエンゲ族の菜園が、本当の意味での『芸術作品 (œuvre d'art)』」(F・パノフ、1969)であると結論づけるだろう。²⁷ここで決定的に重要となる語「『芸術作品』」には「(F・パノフ、1969)」が付せられているが、これは、マエンゲ族の菜園を「芸術作品」とみなす根拠のひとつ、あるいはそうみなす際に参照すべき点がF・パノフの1969年の論文にある、ということを示している。F・パノフとは、彼の共同研究者であるフランソワーズ・パノフのことであり、彼女の1969年の論文とは、『オセアニア』誌に掲載された「マエンゲ族の作物栽培におけるいくつかの様相」のことである。F・パノフはおそらくM・パノフの妻であろう。このような事情から、ここではまず、F・パノフの論文の内容から検討してみる。

彼女によれば、「マエンゲ族は東ニューブリテン地区に住んでいる。その人数はほぼ5,000である。彼らの大部分、その本体は主に南海岸、それもジャキノット (Jacquinot) 湾のまわりに住んでいる。」次にF・パノフはその調査研究が拠って立つ基本的認識についてこう述べる。「焼畑農耕が過去15年間に大きな注意をはらって研究されてきたし、またこのタイプの研究に携わってきた人類学者たちは主に、生態学的バランス、侵食のような現象のコントロール、植物学的知識の観点から、人間の環境にたいする関係を取り扱ってきた。その結果、焼畑農耕 (移動農耕) が定着農耕に劣っているのではけっしてない、という結論に至っている。

〔……〕農耕実践の比較によれば、移動農耕から永続農耕への一方方向の連続あるいは革命は何ら示されない。その環境を適切に扱う『未開の』人間の能力がこのように認識された一方で、レヴィ=ストロースも同様のことを言っているのだが、「数世代前に考えられていたように合理的思考がこの未開人に不可能である、とは断言されもしなかったのである。」かくしてF・パノフの「研究の目標」は、生態学的観点からの叙述で

も、西欧科学の分類システムとの比較でもなく、「マエンゲの人たちがその栽培植物にたいしてもつ特定の関係を明らかにすることである。」²⁸

このような研究目標を掲げた彼女が、その調査結果の一つとして強調している点は、論文の末尾で以下のごとく述べているように、マエンゲ族の作物栽培における彼らの美的価値への深い関心であり、日常生活に根付いた美的価値追求である。マエンゲ族の「農園は、実験がなされる製造所であるだけでなく、諸感覚にとっての喜びの源泉 (a source of delight for senses) なのであり、また家屋の建設や村の祖先の仮面の出演とかを含む儀礼祭事のサイクルにおける一つの重要な輪でもある。」²⁹この一文の後半は農作業と宗教や慣習との深い関係を指摘しているが、前半はまさしく、農作業と美的なものとの不可分の関係を指摘している。なぜなら「諸感覚にとっての喜び」があるとは、F・パノフの論旨から見ても、また「美的」の最も基本的な意味(「感性的に快い」)からしても、「美的な喜び」を意味するからである。なお後に引用するように、明快にも彼女は「美的快楽 (aesthetic pleasure)」という語を使っている。

では「諸感覚にとっての喜び」とは具体的にどのようなものなのであろうか。先の一文のすぐ前にある段落の文中からそれを探せば、以下のような場合に生じる喜びである。それは栽培植物の種類の多様さへのマエンゲ族の深い関心に由来する。主要な作物であるタロイモは或る秩序をもって栽培される。「明白にも、タロイモの菜園はそれの単なる農地ではない」のであって、「これこれのタロイモの種類がそれぞれの場所に植えられ」ていて、「これらの種類が手当たり次第に植えられるはずはない」のである。「新しい品種は、伝統的な作物さえもそうだが、今なお離れた場所と場所との間で物々交換される」し、「一つの品種を他の品種と対照的に特徴づける微妙な違いについて討論するとき、誰も少しももどかしいと思わない」し、「新しい品種は重大な好奇心のもとに検査される」のである。(だから推測するに、菜園でのタロイモの配置は様々な品種と品種との「微妙な違い」をはっきり見せるように常に工夫される。)そしてまた、「誰もがただタロイモを食べるのではなく、或る種類のタロイモを食べるのであって、その味は、その日の前に食べたタロイモの味より美味いか不味いかなのである。」³⁰F・パノフはこれ以上のことをここでは述べていないが、タロイモの匂い、香りも当然関連してくるであろう。かくして「諸感覚にとっての喜び」とは、タロイモの菜園の色彩や形状の配置に関わる点で視覚の、タロイモの味に関わる点で味覚の、その匂いに関わる点で嗅覚の、これら諸感覚の喜びなのである。

さてここで、F・パノフが直ちに「美しい」や「美的」の語を使っているくだりを幾つか引用しよう。「美しい

菜園と豊かな作物とは、必要な食物を供給するだけでなく、他所の世界との良き関係にある人を楽しませることのできる菜園従事者の能力の証拠でもある。菜園作業の成功は、その人の魔法(magic)の能力を包み隠さず明らかに示してきた。」(ここでの「魔法」は、先に引用されたF・パノフの基本的認識からも理解されるように、けっして不合理なものではない。)[「マエンゲ族によって実践されている菜園作業は、社会的承認とは別の満足を差し出す。菜園は諸種の美的性質(aesthetic qualities)をもたねばならず、菜園を計画し菜園に美をそえる(adorning)ことに重大な注意がはらわれている。そのうえ、新しい種類のタロイモ、サトウキビ、バナナ、等々を獲得することは、その人の菜園の資源の潜在可能性を増やすことだけでなく、その人のコレクションに或る珍しい品目を加えることでもある。知的喜びと同様に美的快楽も、菜園活動の重要な要因なのである。』³¹このことは、以下の調査結果によって補強される。

マエンゲ族の主食はタロイモであるが、それだけが菜園に植えられるのではけっしてなく、他の多くの作物とともに植えられる。その種類はタロイモ129種をはじめ、ヤマイモ19種、バナナ40種、サトウキビ45種など、総計248種に及ぶ。これらに加えて、ココナツ、マンゴ、ヤシなど8種類の樹作物が植えられるが、重要なことに、これらは「村の用地、その近辺、村へ続く小道、あるいは古くなった菜園」に植えられるのである。しかも、「生存のため」のこれら「食用植物とともにマエンゲの人々は、医術、技術あるいは祭式に関わる特性をもった多数の植物を植える。」³²その種類はセンネンボク52種、ショウガ3種、レモングラス11種など、総計94種に及ぶ。(ここで我々はそれら農作物の生み出す色彩・形状・大きさ・香り・質感の多様さがかもし出す美しさを想像できるであろう。)

F・パノフは続ける。「マエンゲ族の園芸の著しい特徴は、栽培植物の多様性を重視することである。この人たちは、彼らにとって最も重要な植物の実に多くの栽培変種植物を育てる(女性は平均40種のタロイモを育てる)し、また彼らはその菜園を、これらの種類のそれぞれの特質が人目につくような方法で整える。このことはもちろん、マエンゲ族が種(species)のレベルでの違いを無視するのを意味してはいない。しかし明白なことに、種のレベルでの栽培植物の区分では、彼らの実践上ならびに概念上の必要条件に応えるには不足するのである。」³³

ここで推論するに、菜園を「人目につくような方法で整える」ということは、菜園に「美的性質」を与える、すなわち「美的快楽」が生じるように工夫する、ということである。これは裏返せば、〈より多くより早く〉をモットーとする近代の生産至上主義がマエンゲ族には無縁である、ということである。この主義から

すれば、「美的性質」を与える仕事は無駄である。だから彼らに「労働」の概念はなく、実感もされないであろう。彼らの様々な作業は宗教的や慣習的な行事のサイクル(先のF・パノフの言葉では「儀礼祭事のサイクル」)に埋め込まれていて、丁度我々が余暇としての庭仕事を労苦と感ぜないように、この作業は「労働」ではないのである。彼らは確かに肉体を使って農作業をするが、それには様々な意味が含まれており、なるほど外見上それは労苦であるが、実際には労苦を意識させない意味深い努力行為なのである。

この節を終えるにあたり、ここでのF・パノフの調査結果と、先に言及したヴェルフェルのミューズ教育思想とを関連付けておきたい。ヴェルフェルは言っていた。「内面性がなければ外的現実がなく、想像力がなければ現実がない」という「公理」があると。これは古くからの単純な真理であり、人間が味覚を無限に洗練・選択すること、すなわち内面性により食事の際に幾百もの現実を体験しえることで証明できる。物が人間の尺度なのではなく、人間があらゆる物の尺度なのである。「幸福とは、内面性のために鑄直された現実の豊かさ」なのであると。ここでの「内面性」とは現実逃避的な文芸趣味の態度ではなく、人間に本来的な能力としての「想像力」を指している。それは〈人間が味覚を無限に洗練・選択すること〉に、〈食事の際に幾百もの現実を体験しえること〉に端的に現われている。ただ栄養を摂取するために食するのでなく、その内面において味覚を無限に識別し、その微妙な違いを味わうこと、それが「内面性」の豊かさに他ならない。一方、マエンゲ族は「ただタロイモを食べるのではなく、或る種類のタロイモを食べるのであって、その味は、その日の前に食べたタロイモの味より美味いか不味いか」なのであった。とうことは、彼らは主食の(多種多様な)タロイモを食べる際においても、「美味いか不味いか」に意識を集中して、すなわち味覚に鋭敏になって、その食事を楽しんでいる、ということである。その事態は「食事の際に幾百もの現実を体験しえること」に他ならない。だからヴェルフェルの論理にしたがえば、彼らの生活は「幸福」なのである。そこでは、農産物の出来高のようなく物が人間の尺度なのではなく、味覚を楽しむ〈人間があらゆる物の尺度なのである〉。換言すれば、マエンゲ族の生活での中心問題は、生産の量的程度ではなく、人間の美的感性的な必要なのである。彼らは「即物信仰」に侵されておらず、「精神すべての始まりは暇である」(ヴェルフェル)という法則のもとに生活している。そして現実には彼らはこの世界に生きている。だから我々に示唆するところ多大である。

III-3. M・パノフの知見

ミシェル・パノフの論文「エネルギーと力：ニュー

ブリテン島における労働とその表象」(1977)の主眼は、題名にも表れているように、ニューブリテン島の原住民マエンゲ族の生活における、我々近代人が「労働」と呼んでいるものの存否とその「労働」表象の性格についての解明である。その結論にあたる部分を以下に引用しよう。マエンゲ族には「『労働(travail)』といったような概念は存在せず、『生産活動(activité productive)』を人間の他の行動から切り離して区別する言葉も存在しない。従って、労働の称揚も蔑視もそこに見出そうと期待してはならないのである。かわりに、非常に顕著で頻繁に言及される、痛み(peine)あるいは苦しみ(souffrance)の概念(現地語で*milali*)が存在する。その概念は、とりわけ作物栽培の文脈で現れる。」「『*milali*』の説明部分は省略)かくして「マエンゲの人々の考えに従うならば、我々西洋人が精神的風習から言い表したがるように、作物栽培を人間が労働によって富を生じさせることができるような活動として表わすこと、あるいは菜園において発揮される努力を自然との闘い、もしくは自然を屈服させるための闘争として表わすことはできないのである。上のような図式から出てくるものは、まったく逆に、複数のパートナー(これはパノフによれば人間に限らず自然をも意味する:長谷川注)との契約関係³⁴という思想であり、そのうちの何かが他のものより富んでいたり貧しかったりしてはならないのである。だからこそ、菜園の成功というのは技術的・経済的な事柄であるのと同じくらい、道徳的(morale)なものということになる。それゆえに、とりわけ菜園に関するマエンゲ族の言説は進んで教訓的(moralisateur)なものとなる。それは勤勉と怠惰という対立式ではなく、むしろ契約による獲得と相互性のない略奪行為との対比、すなわち責任というものに対する配慮の欠如(例えば、釣りなどのいくつかの採取行為)への戒めなのである。」³⁵そしてこれについては「現地語のボキャブラリーがまた、ここに直接的な確証を与えてくれる」ので、M・パノフは以上に続けて、問題となるマエンゲ族の——「労働」とは呼べない——活動を表わす現地の四つの言葉(*lege, kuma, vai, rave*)について詳しい意味分析をするのであるが、当拙論ではその成果の紹介をすべて省略する。ただし、以下の一節だけは上記の内容を補強するために引用しておこう。「村の共同社会には、生産活動を行わない有閑階級や指導者、知的専門職などではなく、現地の民俗を理論化しようとする者は彼らの社会機構自体にいかなる労働/非労働の対立モデルも見出すことはできない。」³⁶

このように、マエンゲ族の作物栽培作業には「勤勉と怠惰という図式」も「労働/非労働の対立モデル」も見出されず、ゆえに生産高が主要な関心事とならず、しかも「菜園の成功というのは技術的・経済的な事柄であるのと同じくらい、道徳的なもの」であり、そこ

から「菜園に関するマエンゲ族の言説は進んで教訓的なものとなる」とすれば、この事態のより具体的な内容とその構造は如何なるものであろうか。すなわちそれは、すぐ後に明らかになるように、マエンゲ族の生活における美的価値と倫理的価値との密接不可分の関係である。したがって、それは当拙論の中心問題に直結している。なぜなら、「はじめに」で述べたように、美的・倫理的価値概念としてのミューズのなもの(換言すれば「感性的なものにおける道徳的なもの」)の育成がミューズ教育思想の中心目標であったからである。以下、M・パノフの調査結果をたどっていこう。

マエンゲ族が「1日のうち、大人1人が核家族一世帯の食糧供給にかける時間は、平均4時間であった。」(先のII-2節で、未開の社会では一日三時間ほどの労働で十分に豊かな生活が可能であると述べたが、「平均4時間」はほぼこれに一致する。)しかしこの「算出された時間も、複数の多様な活動に分割されるわけではなく、ほぼすべて焼畑農業、主にタロイモの生産に費やされる。」木の実や蜂蜜、貝やエビ・カニなど自然の資源も伝統的な食糧として存在していたが、それらは補助的な食べ物か「特別な御馳走」にすぎず、またそれら食糧が「即時的で私的な性質」をもつことからして、これらの採集活動は副次的なものにすぎない。集団での網漁も、それが工夫された技術によるにしても、畑仕事のような主要な活動としての位置をもっていない。男たちが漁に動員されることは年に6回もなく、獲物も祭事用の特別なものである。しかも「村の共同体内にはいかなる類の職人や専門家も存在せず、商売も知られていない」ので、食糧栽培がマエンゲ族の主要な生産活動なのである。そしてここで注目すべき点は、「男の仕事と女の仕事」という二分法が彼らの生産活動に当てはまらないことである³⁷。ここからが、M・パノフの調査結果のうちで我々にとって最も重要な部分なのである。これ以後は、まずM・パノフから引用し、そのあとに常に括弧つきで長谷川による分析や解釈を行なう、という方式で論を進める。

「マエンゲ族によれば、畑仕事に必要なとされる資質というのはまた別のものであり、男女に共通するものなのである。では、1ヘクタールあたりの収穫量といったものが菜園家としての女性の良し悪しを判断したり、夫婦の名誉や責任感を認めさせたりするための基準になるのであろうか。そうしたことよりもっと配慮されるべきことが、栽培するタロイモの種を選別する時点にある。およそ200種類³⁸ものタロイモの中から農地の土壌の特性や傾斜、方角、季節、作物の用途に応じて選ぶのである(日常の食糧、年末の御馳走、祭事の飾り用など)。こうした実用的な要請を満たしてしまえば、実際に重要であり、近辺の住人の中からあまり迷うことなく評価すべき候補者を決めるための基準となるのは、美的達成(*réussite esthétique*)と用意

周到さ (prévoyance) の総和である。」³⁹ (後に明らかにするように、後者は「栽培者に求められる」「資質」であり、広義での道徳的能力を意味している。)

M・パノフは続ける。「実利性を軽蔑する19世紀からの思想的伝統⁴⁰のせいで我々には相容れないものと思われる二つの性質が、ここでは緊密に結びついている。菜園に入ったときに目にとびこんでくる美しさ (beauté) や、作物が植えられた空間の心地よい構成 (bonne ordonnance)、土の清潔さ (propreté)、見学者を迎える良い匂い (bonne odeur)、そしてセンネンボクやタロイモ、サトウキビなど様々な植物の葉むらが織り成す微妙な色彩の調和 (harmonie) などといったものが、村人たちの意識における評価を決定づける要素となる。少しでも注意深く、予見を排して見れば、西洋人の観察者はこのマエンゲ族の菜園が、本当の意味での『芸術作品 (œuvre d'art)』(F・パノフ、1969年) であると結論づけるだろう。」⁴¹ (ここに描かれているのは、造られた景観の全体的美しさである。〈多様における統一〉としばしば規定される美がそこに実現されている、と言ってよいであろう。だから「芸術作品」なのである。)

「しかし、もっと深いところへ話を進めなくてはならない。民族誌学者やメラネシア人から美的達成として認められたものは、より目に見えにくい精神的な性質を表すものでもあるのだ。もちろん、それはわが国フランスにおいてボードレールやフローベールを悩ませたような芸術家としての倫理 (éthique) でもなければ、ピューリタン式の労働の賛美でもなく、19世紀にブルジョワ文明が決定的にしたあの分離以前の人間の全的な統一性というヴィジョン (une vision unitaire de l'homme total) である。かくして、他の言語においてもそうであるように、同じ《pe》(《》記号は現地語を示す。以下同：長谷川注) という言葉が『美 (beau)』と『善 (bon)』を表し、『醜 (laid)』と『悪 (mal)』を示すのみでなく、いろいろな『対応関係 (correspondances)』のゲームを通じて多義的な様相を帯びてくるのは、様々な現実そのものである。例えば、快い (agréable) 匂いというものがある菜園の成功を支えたいくつもの要因の総体を表す場合などがそうである。この『快い匂い』という言葉からはまず、メボウキやニシキジソ、ショウガなど⁴²の、観賞や呪術的な役割を果たすために菜園の真ん中に数多く植えられている植物が放つ様々な匂いという意味合いを聞き取らなくてはならない。」⁴³ (ここで指摘されているのは、古代ギリシアで考えられたのと同じ、美と善、醜と悪との対応関係、すなわち〈美は善であり、醜は悪である〉という関係付けである。M・パノフはこのような意味で「人間の全的な統一性というヴィジョン」という言葉を使っていると思われる。だから彼はマエンゲ族の生活に「人間の全

的な統一性」が保たれているとみなしていると思われる。)

「しかし、まもなく日常生活で用いられる互いに関連しあった意味の星座が、こうした経験的な既知事項の概念の後ろに見えてくる。例えば作物栽培に関するにとどまるならば、良い匂いというのは豊穡のしるしであり、あまりにも長い期間農耕に用いたために涸れてしまった菜園や、再生のための休耕期間が不十分な土地は『悪い (mauvais) 匂い』がすると考えられている。これは高度に形式化された農耕信仰の文脈での発言ではなく、いつも村へ行く道でごく普通に耳にするありふれた評言である。良い匂いとはまた、健康の証しであると同時に純粋さの証拠でもある。というのも、病人は逆に悪い匂いがすると言われているからだ。通過儀礼 (現地語で *pinasi*) によって再生したばかりの若者たちは、すべての汚れを洗い流し、その後は良い匂いになると言われる⁴⁴。そして最も広く普及している表象によれば、魔法使いは呪いを準備しているときには悪臭をたなびかせているものであり、マエンゲ族の人たちが信じる悪いことをする妖怪は悪臭を好むという。」⁴⁵ (かくして、「良い匂い」ないし「快い匂い」は「豊穡のしるし」であり、かつ「健康の証しであると同時に純粋さの証拠」でもある。だから論理的には、「悪い匂い」は醜いものを指し、不健康と不純の証拠、そして不作のしるしである。よってマエンゲの共同社会には、諸価値が分裂し自律していない、古代以来のいわゆる凡律的性格の世界観が生きていることになる。古代ギリシアで〈美にしかつ善〉を意味する「カロカガティア」⁴⁶という人間性理念を生んだのも、この凡律性 (Pantomie) を特徴とする思想であった。なお、「悪い匂い」という発言が「村へ行く道でごく普通に耳にするありふれた評言」であるならば、村人相互の批評が頻繁に、日常的に行なわれている、ということである。それは深い意味をもつ美的評価が生活に根ざしている、ということである。)

「次に、栽培者に求められる二番目の資質、すなわち用意周到さというものがある。そのものがどのようなものを詳しく見ていこう。それは、耕された土地の見目の『美と善 (belle-et-bon)』に必要とされる才能と相容れないところか、逆に不可分の資質である。というのも、良い匂いが示す土壌の豊かさというのは、最初から与えられたものではないからである。土壌の豊かさは促進させなければならず、一度それが得られれば維持していく必要があるのだが、そのためには効果的に組み合わせられ、それゆえ前もってよく考えられたいくつもの作業が必要となる。こうした作業とはある種の魔法であり——マエンゲ族の農業が、技術思想に厳密に従い労働力を動かすだけのものに矮小化できないという証拠を補足するものともなるのだが——、西洋において我々が理解しているものとは別の意味における耕作法なの

である。」⁴⁷ (かくして「用意周到さ」とは、菜園を美にして善なるものに変え、その状態を保つための計画的で効果的な作業の能力を意味する。だからそれは、＜多忙と勤勉＞の意味にも通じる＜努力＞の資質を意味している。しかしそれによって期待される成果は「美的達成」であるから、より大きい生産高の成就、より多い財の獲得だけが問題となるのではない。菜園を「芸術作品」のごとく仕上げるのが肝要なのである。それは「美的快楽」を追求する仕事であるから労苦とは無縁である。なるほどそれは「快楽」の一種であるけれども、次に見るように、「人間的なものとのかわり合い」〔前出のオルテガ〕における「快楽」なのである。)

「そしてまたここでも、同じ用意周到さというものが他の諸要因（純粋さ、健康、人間性…）を調べるために用いられるのであり、説明の便宜上、『良い匂い』という概念がもっていた多面性と同じようにそれらを見分ける必要がある。また、菜園を『芸術作品』にするのに寄与している各々の要素（植栽空間の構成や、葉むらの色彩のハーモニーなど）についても同様の推論が繰り返されることによって、栽培者の用意周到さが非常に頻繁に、そして実に多様な状況において試練にさらされることを示すのは簡単であろう。」⁴⁸ (つまり、求められる「純粋さ、健康、人間性」などが備わっているかどうかは、「用意周到さ」を判断基準にして調べられるのである。換言すれば、「用意周到さ」は広義の道徳的資質を言い表しており、これによって成し遂げられるべき個別の価値内容が「純粋さ、健康、人間性」などなのである。しかるにこれらは、「美的達成」の側面であった「良い匂い」がその証しとしてもっていた「健康」や「純粋さ」と、根底的に一致してくる。かくして、その人の「美的達成」を問うことは同時に「用意周到さ」を問うことになり、後者すなわち内的価値を問うことは前者すなわち外的価値を問うことになるわけである。そして「試練にさらされること」とはそれらが＜問われる＞ということであり、それが「非常に頻繁に、そして実に多様な状況において」行なわれるのである。それは＜問う－問われる＞という村人の相互批評の営みが日常的である、生活に不可欠な部分である、ということである。それは楽しくもあるが、緊張感に満ちたものでもあるだろう。しかしそれは次に見るように、虚礼ではなく、共同社会を成り立たせていく対話の行為なのである。)

「そして『社会的全体の行為 (fait social total)』のサイクルの締め括りとして、最も実用的な技術や緻密な象徴記号、最も狭義のエゴイズム、最大限の連帯感を結集させるのは明らかに年末の儀礼的大祭の開催である。それは個人の責任感や用意周到さを評価するための、公の意見による最終的な試験の役割を果たすもので、評価を受ける者たちは招待者たちに御馳走をふるまう役をつとめる。この古代ギリシアの『課役

(liturgie)』にもよく似て華々しく、面目を失い永久に野心を抱けなくなることもある大行事では、異なる精油同士が調合によって強い香りを生み出すように、すでにマエンゲの人々の菜園での仕事ぶりに観察者が次々と心打たれてきたような、あらゆる認知的、感情的、実践的なニュアンスが、互いに混ざり合い熱を帯びる。その後になって、それらの存在意義が見出されるのである。」⁴⁹ (このように「年末の儀礼的大祭」においては「個人の責任感や用意周到さを評価するための、公の意見による最終的な試験」が行なわれるのであるが、その機能は競争と選別にあるのではない。この「試験」は「最も狭義のエゴイズム」と「最大限の連帯感を結集させる」のであるから、それは村の共同体の体制を維持し強化させるのである。しかもこの「大行事」では「あらゆる認知的、情緒的、実践的なニュアンスが、互いに混ざり合い熱を帯びる」のであるから、それは、人間存在のあの最も基本的な三次元〔認知的、情緒的、実践的の次元〕すべてにおいて人間諸力が生き生きとはたらく場でもある。だから個々の村人はその全人格をかけてその場に臨むことであろう。ところでF・パノフによれば、村人たちは「一つの品種を他の品種と対照的に特徴づける微妙な違いについて討論するとき、誰も少しももどかしいと思わない」⁵⁰のであった。討論をいとわないのは、あの三次元において人間諸力が生き生きとはたらくからである。F・パノフの言葉を使えば、そこでは「知的喜び」と「美的快楽」とが同時に生じていることであろう。ということは、「大行事」においても「評価を受ける者」も＜評価を与える者＞もその討論、すなわち対話的行為を享受している、ということである。だからそれは過酷な生存競争の場ではなく、個々の人格相互の承認を前提とした連帯性形成の場なのである⁵¹。村人は楽しみながら「社会的全体の行為」に参加しているのである⁵²。)

以上、M・パノフの調査結果を引用しながら、その内容を分析し解釈してきた。ここでそれを纏めてみよう。マエンゲ族には「労働」の概念はなく、ゆえに「労働の称揚も蔑視」もなかった。必要な「菜園の成功」は「技術的・経済的な事柄とおなじくらい」に「道徳的なもの」であった。この事態は、その共同社会で高く「評価すべき候補者を決めるため」の二種の「基準」が、「美的達成」と「用意周到さ」であることから理解される。なぜなら、「用意周到さ」とは広義の道徳的資質であり、これによって成し遂げられるのが人間にとって根本的に重要な「純粋さ、健康、人間性」であったからである。これらが人間の内的価値であるとすれば、外的価値を示すものが「美的達成」であり、菜園を「芸術作品」に仕上げることであった。「美的達成」の指標のひとつである「良い匂い」は「快い匂い」であるが、これはまた「豊穡のしるし」でもあり、かつ「健康の証しであると同時に純粋さの証拠」でもあっ

た。だから「悪い匂い」は美と反対の醜を指し、不健康と不純の証拠、そして不作のしるしである。かくして「美的達成」と「用意周到さ」とは不可分の関係にあった。前者には後者が前提とされ、後者の証明には前者が必要とされた。だから、道德資質としての「用意周到さ」と美的活動成果としての「美的達成」とが表裏一体のものとなっている。換言すれば、人間における倫理的なものと美的なものとは渾然一体のものとなっている。ここからしてM・パノフが言うには、マエンゲ族には「人間の全的な統一性というヴィジョン」が認められるのであった。その背景には、古代ギリシア以来の凡律的性格の世界観と同様な性質をもつ世界像がある。

そしてM・パノフ論文に認められるもうひとつの重要な点は、菜園の「美的達成」についての村人相互の批評が頻繁に、日常的に行なわれており、しかも特別な「年末の儀礼の大祭」において「個人の責任感や用意周到さを評価するための、公の意見による最終的な試験」が行なわれることであった。だから日常的にも非日常的にも村人の「連帯感」が生じるのであった。これは、「美的達成」と「用意周到さ」をめぐる相互評価、すなわち美的評価と道德的評価とによって村の共同体体制が維持され強化されることを意味する。

しかしここで特に注意すべきは、これら相互評価の具体的基盤となっているのは、F・パノフの言葉を使えば、「知的喜び」の体験であるとともに、「諸感覚にとっての喜び」（「美的快楽」）の体験である。このような美的体験は一般に自然な、人間に生得的な感性的快のそれであり、自然に快いからこそ、「美的達成」は言うに及ばず「用意周到さ」をめぐる相互評価も、単に知的や論理的にかたよらず、生活実感をとともなうものとなるのである。このような快の美的体験は人びとによって容易に共有される。美はたやすく共感され共鳴される。だからそれは共同の体験となり、そのことが村人の連帯性、共同性を守り高めていくための基礎の基礎となる。「知的喜び」もかかる美的体験がその背景になれば、内容空虚な知的ゲームに陥るであろう。また村人に課せられる道德的義務の拘束感もこの美的体験によって緩和されるであろう。村人たちの心をつなぐ基礎の基礎は、あの「芸術作品」となった菜園を媒介にして共有される美的体験である。このような意味がM・パノフ論文に込められているものと考えられる。

最後に忘れず指摘しておくべき点は、かかる「芸術作品」であるような菜園を念入りにつくる仕事は、もはや生産至上主義に由来する労苦ではなく、「人間における人間的なもののかかわり合い」としての「余暇」（オルテガ）の性格をもっていることである。なるほど、その成果は公の相互評価にさらされるけれども、それは専門的技能を競い合う芸術家的な作品ではな

く、いわば素人的な作品、芸術愛好家の成果である。もうしそうでないなら、マエンゲ社会においては問題の技能が高度に発達していたはずであるが、事実はどうでもない。その意味で彼らの菜園作業は遊戯の性格を持っていると言える。ただしそれは、個々の人格をかけた、ゆえに熱を帯びた遊戯である。しかもそれは、「美的快楽」を遣り取りする遊戯である。

IV. おわりに

当拙論の主たる意図は、「ミューズ的なものの生活空間」である余暇が支配する生活を実現するための方法上のヒントとなる生活モデルを、マエンゲ族の生活のなかに求めることであったが、以上によってそれはほぼ達成されたであろう。

なぜなら、ハーゼが言うように「ミューズ的なものの生活空間」は「余暇的時間」のなかにあり、また「ミューズ的なものの生活空間は遊戯である」ならば、まさしく、この「余暇」と「遊戯」とがマエンゲ族の生活のなかに見出されたからである。しかも、ヴェルフエルが唱えた、「精神すべての始まりは暇である」という法則が彼らの生活のなかで作用していた。

だからマエンゲ族の生活には、「勤勉と怠惰という図式」も「労働／非労働の対立モデル」も見出されなかった。彼らが求めたのは勤勉・労働ではなく、「用意周到さ」という道德性であり、これによる「美的達成」であった。だから見出されたのは＜美／醜、善／悪という対立図式＞であり、＜美＝善、醜＝悪という関連図式＞であった。「美的達成」が目に見える外的価値の課題であったとすれば、「用意周到さ」は目に見えない内的価値の課題であった。その意味で、「用意周到さ」と「美的達成」とは不可分、表裏一体の関係にあった。だから理論上、マエンゲ族の価値意識は美的一倫理的なものであった。しかるに、「はじめに」で述べたように、ミューズ的なものとは美的一倫理的価値概念であり、換言すれば「感性的なものにおける道德的なもの」であった。したがって、マエンゲ族の生活にはこの＜ミューズ的なもの＞が作用している、と言ってよいであろう。この点からしても、ミューズ的生活を実現するための方法上のヒントとなるモデルを、マエンゲ族の生活のなかに見出すことができた、と言えるのである。

さらに以下のようにも考えることができる。「道德的なもの」を「用意周到さ」以上に広く捉え、しかも平易に表現すれば＜人間の善なる生き方＞であろうが、これが「感性的なもの」において表現されていること、それがミューズ教育思想において唱えられた課題である。だとすれば、M・パノフ論文で描写されたマエンゲ族の生活には、この課題が日常的に達成されているものと考えてよいであろう。なぜなら、すでに何度も論じて明らかになったように、エゴイズムを避けて村

の連帯性、共同性を守り高めるような行動をすることが彼らの生活の原則であったが、それは<人間の善なる生き方>であると一般に考えられるからである。ここで道徳論を展開する余地はないにしても、人間の連帯性が政治的・社会的概念であるにとどまらず、道徳的価値概念でもあることはほぼ異論ないであろう。かくして、「感性的なもの」すなわち「諸感覚にとっての喜び」となる「美的達成」において、「道徳的なもの」すなわち連帯性という道徳的価値が表現されている生活モデルをマエンゲ族のなかに見出すことができる。この点からしても、ミューズの生活を実現するための方法上のヒントとなるモデルを、マエンゲ族の生活のなかに見出すことができた、と言えるであろう。

この「方法上のヒント」から如何にしてより具体的、実際のな方法を編み出すかは、筆者の専門範囲を超え出る問題である。当拙論の扱うべき範囲は概して、ミューズ教育思想の観点からマエンゲ族の生活を検討することであった。

〔註〕

- その代表的論文は以下：「ミューズ教育の研究〔Ⅷ〕—ミューズ教育思想の歴史的概観—」、『美術教育学』第24号、2003年、275—291頁。
- 拙著『ミューズ教育思想史の研究』風間書房、2005年12月。
- この「一連の企て」のうちすでに発表したものに、学位論文においても扱ったハーバート・リードの芸術教育論を主題にした以下の論文がある。「美的・政治的教育構想としてのH.リードの芸術教育論」、『美術教育研究』（東京芸術大学・美術教育研究会）、No. 9、2004年、48—67頁。
- Otto Haase : *Musisches Leben und künstlerische Erziehung*. (1960), in : Norbert Kluge (Hrsg.) : *Vom Geist musischer Erziehung : Grundlegende und kritische Beiträge zu einem Erziehungsprinzip*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1973, S. 249. (SS. 247-256.)
- ミューズ教育思想が常に方向指導的となしたきたシラーの美的教育論を扱った拙論「シラーの美的教育論とミューズ教育思想」(『和歌山大学教育学部紀要—教育科学—』第51集、2001年、21—54頁)の41頁において、W・ネツェルによるシラー解釈(Wilfried Noetzel : *Humanistische Ästhetische Erziehung : Friedrich Schillers moderne Umgangs- und Geschmackspädagogik*, Deutscher Studien Verlag, Weinheim 1992.)に基づいて以下のように述べておいた。：「美的教育によって「人間の変革」を行ない、それによって「社会的革命」を期するというのは、結局現状を何ら変革せずに終わる夢想的なユートピア的思考なのかもしれない。しかしこれに対しては、今日の「後期資本主義社会を基盤とした議会制民主主義に対しては、シラーが当時提案した改革プログラム(人間の交際形式の美学化[つまり自由で平等な人間交流の快楽化]による社会の自発的な民主主義化：長谷川注)のもつ原理上の現代性が主張される」とのネツェルの主張(第Ⅳ章第1項参照)が対置されるであろう。」
- この言葉は教育学者フリットナーの論文「ミューズの陶冶と時代状況」での一節。Wilhelm Flitner : *Die musische Bildung und die Zeitlage*, in : *Die Musikpflege*, Jg. II (1931/32), S. 494.
- Otto Haase : *Musisches Leben und künstlerische Erziehung*, a. a. O., SS. 248-249.
- 田淵晋也訳『怠ける権利』、人文書院、1972年、14—67頁。(Paul Lafargue : *Le droit à la paresse*, Librairie Francois Maspero, Paris 1970.)
- 山内昶訳『石器時代の経済学』、法政大学出版局、1842年、50頁。(Marshall David Sahlins : *Stone Age Economics*, Aldine Publishing Co., New York 1972.)
- 同上訳書、52頁。
- 前掲訳書『怠ける権利』、68—72頁
- 同上訳書、72—73頁
- Fritz Seidenfaden : *Die musische Erziehung in der Gegenwart und ihre geschichtlichen Quellen*, A. Henn Verlag, Ratingen 1966 (1. Aufl., 1962), S. 21.
- Franz Werfel : *Realismus und Innerlichkeit*, Paul Zsolnay Verlag, Wien 1932, SS. 5—14.
- Ibid., SS. 18—21.
- Ibid., SS. 22—25.
- Ibid., S. 26.
- 詩人・美学者であるハーバート・リードは以下のように述べているが、けだし名言であろう。「個人の立場においてわれわれが創作するのは伝達 (communication) のためである。芸術は一つのきずな (a bond) である。〔……〕芸術はわれわれの共同体的 (communal) 生活の統合的 (integral) 部分をなすものでなければならぬ。」(Herbert Read : *The Grass Roots of Art*, Faber and Faber, London 1955, P. 108., [増野正衛訳『芸術の草の根』、岩波書店、1956年、130頁。])
- 寺田和夫・増田義郎訳『南太平洋の遠洋航海者』(Blanslaw Kasper Malinowski : *Argonauts of the Western Pacific : An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*, George Routledge & Sons, Ltd., London 1922.), 泉靖一編『世界の名著第59：マリノフスキー／レヴィ＝ストロース』所収、中央公論社、1967年、93—94頁。
- 同上訳書、127—128頁。
- 同上訳書、130頁。
- 同上訳書、200—201頁。
- 同上訳書、129—130頁。
- Otto Haase : *Musisches Leben und künstlerische Erziehung*, a. a. O., S. 249.
- 山内昶はその『経済人類学への招待』(筑摩書房、1994年、95—96頁。)において人類学者W・ステント／L・ウエップの著作(書誌データ不明)から以下を引用しているが、その内容は当拙論の主張とまったく軌を一にするものである。「西洋の用語でいうと、パプアニューギニア人の菜園労働に対する態度は、いわば商品市場の園芸家であるよりも、むしろ素人のバラ愛好家にちかいいえるだろう。」なお当拙論で参照されるM・パノフの論文の文明論的重要性を早くから指摘したのはこの山内昶『経済人類学への招待』(94頁)であろうと思われる。
- ニューブリテン島はパプアニューギニアの領土で、ビスマーク諸島の主島。細長く湾曲した火山性の島。総面積は36,500平方キロで、九州と沖縄を合わせたほどの大きな島である。北端にラバウルのある北東部はすでに開発が進んでいるが、南西部はそうでない。
- Michel Panoff : *Energie et vertu : Le Travail et ses*

- représentations en Nouvelle-Bretagne, in: *Le travail et ses représentations / textes rassemblés et présentés par Michel Cartier*, éditions des archives contemporaines, Paris 1984, P.24. (PP.19-37.)
なおこの論文の初出は以下のごとく『ロム』誌1977年である。Michel Panoff; *Energie et vertu*, in: *L'Homme: revue française d'anthropologie*, Paris, avri.-sept. 1977, X VII (2-3), PP.7-21.
- 28 Françoise Panoff; *Some Facets of Maenge Horticulture*, in: *Oceania: a journal devoted to the study of the native peoples of Australia, New Guinea and the islands of the Pacific Ocean*, Melbourne, Vol.40, No.1, 1969, P.20. (PP.20-31.)
- 29 Ibid., PP.30-31.
- 30 Ibid., P.30.
- 31 Ibid., PP.21-22.
- 32 Ibid., P.23.
- 33 Ibid., P.24.
- 34 豊田由貴夫によれば以下。「ビッグマン」の概念と並んで、「パプアニューギニア、あるいはメラネシアの伝統的な社会を理解するためのもう一つの重要な概念が『交換』の原理である。メラネシア地域では一般に祭りや儀礼の際に財や食料を親族組織・村落などを単位として贈与する、ということが行なわれる。そしてこれは別の機会に相手からの贈与を受けることになり、結果として『交換』の形式をとる。」豊田由貴夫「パプアニューギニアの人と自然」、東京農業大学・海外学術調査隊編著『秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る』、東京農業大学創立100周年記念事業実行委員会、1994年、156頁。
- 35 Michel Panoff; *Energie et vertu: Le Travail et ses représentations en Nouvelle-Bretagne*, op.cit., PP.26-27.
- 36 Ibid., P.33.
- 37 Ibid., P.22.
- 38 先のF・パノフの調査では129種であったので、合致しない。真実は不明である。
- 39 Michel Panoff; *Energie et vertu: Le Travail et ses représentations en Nouvelle-Bretagne*, op.cit., PP.23-24.
- 40 これは、ほぼ18世紀に始まる実利主義的(俗物根性的)なブルジョワ精神を嫌悪し批判した19世紀の芸術家たち(ボードレールなど)の思想的態度のことを意味している。例えばキーツは「用はすべてのものを醜くする」と言ったと伝えられる。
- 41 Michel Panoff; *Energie et vertu: Le Travail et ses représentations en Nouvelle-Bretagne*, op.cit., P.24.
- 42 ニシキジソ属は別名コリウスともいうシソ科の植物で、精油や芳香として用いられる種類のほか、観葉植物として園芸に用いられるものもある。メボウキ属もシソ科の香草でバジルの名称で知られるのもその一種。(前掲『秘境パプアニューギニアに農耕の起源を探る』での「VII 参考資料」を参照のこと。) ショウガ(*Zingiber officinale*)はパプアニューギニアにおいては、薬および呪術(あるいは呪術に対抗するまじない)に用いられるが、現地の呪術は医療行為をも含んでいることから、薬用と呪術はひとつのものとして考えられていると思われる。(鉄木継美『パプアニューギニアの食生活』中公新書1991年を参照のこと。)
- 43 Michel Panoff; *Energie et vertu: Le Travail et ses représentations en Nouvelle-Bretagne*, op.cit., P.24.
- 44 イニシエーション儀礼については、豊田由貴夫「パプアニューギニアの人と自然」(前掲)を参照のこと。
- 45 Michel Panoff; *Energie et vertu: Le Travail et ses représentations en Nouvelle-Bretagne*, op.cit., PP.24-25.
- 46 「カロカガティア」については、竹内敏雄編修『美学事典』増補版(弘文堂1974年)の499頁を参照のこと。
- 47 Michel Panoff; *Energie et vertu: Le Travail et ses représentations en Nouvelle-Bretagne*, op.cit., P.25.
- 48 Ibid., P.25.
- 49 Ibid., PP.25-26.
- 50 Françoise Panoff; *Some Facets of Maenge Horticulture*, op.cit., P.30.
- 51 ミューズ教育思想が常に方向指導的とみなしたきたシラーの美的教育論を扱った拙論「シラーの美的教育論とミューズ教育思想」(前掲)において、人間の連帯性の必要についてのシラーの一節を引用しておいたが、ここでも再度引用しておきたい。「利己主義(Egoism)の体系がもついたのは、老獪きわまる社会性の真っ只中だったのであり、我々は連帯的な心(ein geselliges Herz)を同時に生むこともなしに、社会のありとあらゆる汚染、災厄を経験します。」(石原達二訳「人間の美的教育について」〔通称「美的教育書簡」〕、同訳『シラー 美学芸術論集』、富山房、1977年、100頁〔第6書簡〕。)[「ただ美的伝達(die schöne Mitteilung)のみが社会を統一します。」(同221頁〔第27書簡〕。)]ここからしてシラー理論の核心を美的-政治的教育構想と捉えることが可能であり、それ故ミューズ教育思想の核心を同様に捉えることが可能である。上記拙論においてこのことを明らかにしておいた。
- 52 今村仁司はその『近代の労働観』(岩波書店、1998年、183-184頁。)において「労働文明の転換」という観点から(M・パノフの調査結果をもとに)マエンゲ社会を参照して以下のように述べているが、対話による連帯性形成という事態のここでの認識と基本的に合致している。「マエンゲ社会では、尊厳と威信の競り合いは『私的な』競争ではなく、公共的空間のなかに位置づける競り合いになる。このようにしてマエンゲ社会では、個々人を『公的人格』へ構成していく。」ここでは「小さいとはいえ、本格的な『レス・ブブリカ』(共和国)が成立しているのである。」